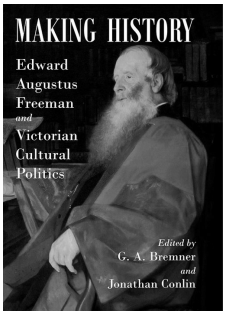
書　評



G. A. Bremner and Jonathan Conlin, eds., *Making History: Edward Augustus Freeman and Victorian Cultural Politics,* Proceedings of the British Academy 202
(Oxford: Oxford University Press, 2015)

舟川　一彦

タイトルに個人名を掲げた本を滅多に書評対象として採り上げることがない本誌の編集委員会がこの本を選択し、それを歴史学の専門家でない私に割り当てたのは、この本の内容が様々な文脈の中に置かれて文化研究の名にふさわしい多様な方向に発展する可能性を秘めていると判断されたからだろう。しかし、任務を与えられた身としては、少々困ってしまった。書評者としての足場をどこに置くべきか見当がつかないのだ。そもそも、歴史家フリーマン（E. A. Freeman）という存在が日本の歴史研究者の間でどの程度知られているのか、知られているとすればその人物像と仕事はこれまでどのように評価されてきたのか。彼の主著『ノルマン征服史』（1867–76）は英国史研究者にとって今でも古典あるいは必読書と見なされているのだろうか。「歴史は過去の政治、政治は現在の歴史」という彼の格言風の一文は標準的引用句として定着しているのだろうか。こういうことについて、恥ずかしながら、私は判断のすべをもっていない。フリーマンについて事前にもっていたのは、19世紀中葉から後半のオクスフォードを彩る偏屈で悪口好きの奇人という表層的なイメージに過ぎなかった。

この本は、2012年7月にハーデンとマンチェスターで開催された「E・A・フリーマンの生涯と時代」をめぐる学術会議で発表された16篇の論文を収めている。したがって、通常の単著研究書と違って一貫した論旨の流れがあるわけではなく、最初に挙げた理由とも相まって、まとまりのある書評論文を書くことはなおさら難しいと言わなければならない。とはいえ、泣き言を言っても仕方がない。書評者の最低限の義務として、まずは（単調かつ冗長になることを覚悟して）各論文に何が書かれているのかを

一通り紹介することから始めてみよう。

第一論文は二人の編者（G. A. Bremner and Jonathan Conlin）による導入的な序論で、以下に続く各論文の背景となる前提的な事実を確認することにあてられている。フリーマンの歴史記述について、客観的・科学的な歴史学を標榜しながら（現代的規準からすれば）到底科学の規準に合致しない部分があることが指摘されるほか、少年期と学生時代に受けた様々な——特にトラクト運動やトマス・アーノルドの——影響や彼の歴史観の基礎をなす進化論的「発達」の概念と人種観の概略が紹介される。

続いて、第二部として彼の歴史研究に反映する宗教・政治的信条を扱った3篇の論文が置かれる。James Kirbyは、フリーマンがトリニティ・カレッジ在学時に受けたトラクト運動なかんずくハレル・フルードからの影響を論じる。フリーマン成熟期のリベラルな民主政治志向の立場を若い頃のトーリー／高教会主義からの路線変更の結果と見なす従来の定説に反して、フルードから学んだ政治観（特に反エラストゥス主義の信条）こそが彼の後年のグラッドストン的リベラリズムを基礎づけており、彼の立場は基本的に一貫しているのだと結論する。次のColm Ó Siochrúの論文もまた、フリーマンの宗教・政治的立場が終生一貫していることを、ローマに象徴される帝国と教皇権の理念との対峙というモチーフに着目しつつ論証しようとする。Michael Ledger-Lomasの論文は、世襲のホイッグであり国家と教会の一体性を主張して国教制度を擁護するA・P・スタンリーとの比較を通して、国教会についてのフリーマンの態度を明らかにするという触れ込みのようだが、論文の大部分がスタンリーの立場を解説することにあてられている上に、論者のシンパシーも明らかにスタンリーの側にあり、フリーマンが主役であるはずのこの論文集の中で異彩を放つ一篇となっている。

第三部には、フリーマンにおける歴史と地理の密接な関係を扱う3篇の論文が配置されている。出来事の現場を訪ねて観察する「歴史巡礼（旅行）」がフリーマンにとって歴史研究の必須の一部であったことを強調するWilliam M. Airdは、アドリア海沿岸諸国への旅行記を例にとって、彼のアプローチが「空間論的転回」という点でアナール学派の発想を先取りしているとともに、現代——彼にとっての現代——の国際政治の状況に関わ

る偏見をも露呈していることを示す。アナール学派へのこの言及は、この本の中でフリーマンの歴史記述を現代――我々にとっての現代――の歴史学の営みと関連づけているほとんど唯一の箇所と言ってもよい。Jonathan Conlinは、フリーマンが1881年から翌年にかけて行なったアメリカへの講演旅行の経緯と内容を裏事情を含めて紹介し、アメリカを第三の故郷とする特権的なテュートン民族という彼の理論を検証している。William Kellyは、「東方問題」へのフリーマンの強い関心が、彼の主たる研究主題であるギリシア－ローマ－テュートンと引き継がれるヨーロッパの主流史への関心と表裏一体であり、西と東の今も続く対立関係こそが世界史を貫く主問題だとするところに、フリーマンを含むヴィクトリア朝人特有の〈過去と現在の時間意識の融合〉が見られると結論する。

続いて第四部では、建築論にあらわれるフリーマンの歴史意識を3人の論者が検討している。Chris Mieleは、ゴシック建築復興にフリーマンが果たした功績の背景に彼がトマス・アーノルドから学んだ歴史観があると指摘し、彼の『建築史』(1849)は、建築様式の発展をその基礎をなす歴史状況の変化との相関関係において体系的に説明しようとした最初の建築論だと言う。Christine Dade-Robertsonは、ウォルサム・アビーの時代測定をめぐるフリーマンと『ジェントルマンズ・マガジン』の書評家との論争、および前者の敗北の経緯を通じて、実証できる厳密な真実への志向とロマンスへの志向が彼の中で奇妙に同居していた事実を描き出している。G. A. Bremnerは、フリーマンがゴシックの理念をめぐって現場の建築家G・G・スコットに与えた影響力の消長をたどり、二人の共感関係や目的意識の微妙なズレを観察することにより、建築界の主流に地歩を築くことができなかった理論家としてフリーマンを位置づける。

第五部は、人種と帝国主義というおそらく最も重い問題に対するフリーマンの態度を扱った2篇の論文から成る。Theodore Koditschekは、フリーマンにおける歴史学と現実政治の関係について、歴史が政治に先行したとする通説を裏返して、彼の特殊なリベラリズムに基づく政治的アジェンダが彼の歴史研究を方向づけ色づけした――Koditschekの論文のタイトルに使われた語でいえば「人種にかかわる伝統を創作(invent)」した――のだと言う。現代におけるオスマン帝国とトルコ人への嫌悪が、テュートン族の

始祖と現代イギリス人の連続性とその優越性という（今となってはレイシズムと呼ぶしかない）信念を生み出した。そしてそれを政治形態の観点から「説明」するために書かれたのが彼の数々の歴史研究書だったというのだ。Duncan Bellもまた、テュートン系民族（特にイギリス人）の他民族に対する優越性に基づく反帝国主義と、英米にまたがるイギリス人を中心とする世界秩序の構築というヴィジョンをフリーマンに見出している。

第六部では、フリーマンにおける歴史学の理念を3人の論者が論じる。まずJudith A. Greenが、主著『ノルマン征服史』全5巻にあらわれた歴史学および歴史家についての彼の見解を整理し、5つの項目にまとめた上で各項目について評価を下している。総括的な評価としてGreenは、フリーマンが学問的レベルにおいて同時代の中世史研究の先端から取り残されているのが最大の問題だと言明する。Ian Heskethの論文は、1870年代オクスフォードで一種のエンターテインメントの様相を呈したフリーマンとJ・A・フルードの諍いを、従来とは若干違った面に光をあてて解釈している。通常、客観的科学としての歴史学と文学的・物語的な歴史記述の争いという観点から説明されてきたこの対立関係を、Heskethは宗教と教会をめぐる高教会派（フリーマン）と世俗主義者（フルード）の対立として捉え直すのだ。「歴史的方法（historical methods）」というフレーズの意味を分析したHerman Paulの論文は、フリーマンの考える歴史学の学としての性質に重要な光をあててくれる。ドイツ起源（ランケ流）の精緻な史料批判の方法論が（例えばアクトン卿の著作を通じて）定着し始める時代にあって、彼が「歴史的方法」と呼んだものは、ある種の「思考と研究の習性」から得られる「感受性」であり、過ぎ去った時代の本質を「直観的」に把握する能力にほかならない。この意味で、科学的歴史研究を標榜しながら彼の歴史学はその後の歴史学研究を支配することになる細分化された特定の時代に集中する専門科学精神と相容れない。上に見たように、この本の序論で二人の編者はフリーマンの歴史記述が結果的に科学の規準を満たしていない場合があることを指摘したのだが、Paulはさらに根本的に、科学からの逸脱は結果だけではなく彼の歴史家としての方針に属することを明らかにしたと言えるだろう。

最後に、結論と銘打った第七部に、歴史学の専門家としての立場と

ジャーナリズムを通して一般読者に語りかける知識人としての立場の兼ね合いを論じたH. S. Jonesの論文が単独で置かれている。

私の力不足のせいでがっかりするほど平板な要約になってしまったが、言うまでもなく、きちんと通読すれば大変勉強になる本であることは間違いない。また、個々の論文の中には、例えば結論の部に置かれたJones論文のように、インターディシプリナリーな文化研究に材料を与えてくれそうなものもある。しかし、全体としてみればこれは史学史という専門分野に属する専門書、しかもかなり専門性の高い専門書であるように思われる。そして、専門書にふさわしくきわめて禁欲的で、それぞれの論者は自分が設定した主題から決してはみ出すまいと心がけながら書いているかのような印象を受けるのだ。Airdの論考を紹介するついでに触れたように、現代（20世紀や21世紀）の歴史学との関係やフリーマンの現代的意義への言及は、「フリーマンの生涯と時代」という会議のテーマに慮ってか、慎重に（？）避けられている。視野を19世紀の範囲に限定しても、個々の論者はその時代の歴史学の全般的見取り図や、世紀全体を通じての歴史学の発展の通時的マップを提供しようとしないので、こうした情報については例えばIan Hesketh, *The Science of History in Victorian Britain*（2011）（本誌第9号に村岡健次氏による書評あり）のような本から補わなければならないだろう。

禁欲的になるあまりにこの本では誰も言及していないけれども、関連させて考えた方がいいと思われるものが、あと二点ある。それは、ヴィーコおよびニーブールの名前と、1850年に新設されたオクスフォード大学の「法学および近代史」学位試験コースに対するフリーマンの反応である。この論文集に展開される16篇の議論を綜合した時に見えてくるのは、フリーマンの歴史研究は古代から現代までのあらゆる文明を視野に入れて人類の進歩の一般法則を把握しようとするすぐれてヴィクトリア朝的な態度に発するものにほかならず、事実の厳格な実証を重んじる20世紀歴史学よりはむしろ大きな物語を求める夢想と発想を共有しているということだ。その意味では、現代の目から見て彼を頑固で気むずかしい変人と特徴づけるのはあながち誤りとも言えなかったわけである。オクスフォードの古典人文学学位試験は、この偏屈な態度の具現化にほかならなかった。1850年

の試験制度改革は、世紀前半のオクスフォードの教育体制に対する世間からの批判へのひとつの対応策で、古典人文学（古典文学、古代哲学、古代史）への過度の集中を和らげ、カリキュラムの拡幅と専門分化・選択制度を導入することで大学教育を近代化する第一歩として提案されたものだった。のちに欽定近代史教授の座に就くことになるフリーマンが、この時、古典から独立した近代史コースの設立に誰よりも激しく反対したのは注目すべきことである。その時彼は、ヴィーコとニーブールを後ろ盾として古代史研究の意義を裏づけたトマス・アーノルドの名をヒーローとして挙げ、改革以前の制度を正当化したのだった（*Report of the Oxford University Commission*（1852）, Evidence, pp. 138–39 を見よ）。この事実は、歴史学への基本的なアプローチに関して彼がよりどころとしたのが19世紀前半の古典教育の基盤にあった歴史観であり、その点で、当時の知的状況の中で彼がゆるぎない保守派として分類されるべきことを示している。こうした点に言及すれば、上に紹介したPaulの論文などはさらに説得力を増したのではないだろうか。

――上智大学教授